

ピエトロ・フォルティニー 『初心者たちの楽しき愛の夜』の輪郭

米山喜晟*

はじめに

私は本学総合研究所が刊行している『国際文化論集』第30号において、シエナ市民ピエトロ・フォルティニーが書き残し、いくつかの作品がアンソロジーに選ばれることはあっても、つい近年まで完本が活字にされていなかった『初心者たちのノヴェッラの日々 (LE GIORNATE DELLE NOVELLE DEI NOVICI)』¹⁾ (以下で『日々』と略記) という作品の輪郭と全ノヴェッラの粗筋とを紹介した。実は同じ作者には、その続編とも言える更に長い作品が残されていた。『日々』の本文がサレルノ版で877ページであり、すでにノヴェッラ集の常識を超えた長さの作品であるのに対して、続編の方は本文が1340ページ、『日々』の1.5倍を軽く超えている長大な作品である。それには『初心者たちの楽しき愛の夜 (LE PIACEVOLI E AMOROSE NOTTI DE'NOVICI)』²⁾ (以下で『夜』と略記) というタイトルが付けられていたが、勿論『日々』と同様つい近年まで完本が活字にされたことがなかった。作者が生きていたころに出版を困難にしたと思われる教会や権力者に関わる問題は時代とともに解消して、19世紀の末に一度完本を出版する試みがあったらしいが、おそらく長大過ぎて採算が取り難いこ

* 本学文学部

キーワード：フォルティニー、シエナ、額縁、『楽しき愛の夜』、性行為

ともあって、「知られている通り未完成に止まった」³⁾とされている。実は完全な形でこの作品を出版することが困難な理由の一つはテキストの破損が著しいことで、19世紀末に一部が刊行された時、その点を考慮せずに刊行が進められたために、その版の既刊の部分はテキストとしてあまりあてにならないという評価が定まっているという⁴⁾。ところがこれら二つの作品は、この度エンリコ・マラーの総監修の下でローマのサレルノ書店から刊行された双書『イタリアのノヴェッラ作家』に採択されて、アドリアーナ・マウリエッロの校訂によってようやく日の目を見た。筆者はその前編である『日々』において、フォルティーニが独特の偏りを示していることを明らかにしたが、後編において作者はどのような変貌を遂げたであろうか。またフィレンツェ市民に対して異常な対抗意識を燃やしがちなシエナ市民の一人でありながら、この作者は『日々』の枠組に関して、フィレンツェ市民ボッカッチョの『デカメロン』の額縁のモデルを忠実に踏襲していたが、『夜』ではその点がどうなっているのか。筆者は以下で『夜』の輪郭を紹介しながら、それらの点に答えておきたい。

第一章 作品の構成

「初心者 (NOVICI)」という共通の言葉と「日々 (GIORNATE)」及び「夜 (NOTTE)」という対の言葉を用いたタイトルからも想像できるように、『夜』は『日々』の延長線上に、その続編として書かれたことは、『日々』の最後の日に女主人を務めたアウレリアが、このまま愛の談義を打ち切っては惜しいので次の日曜日まで自分が女主人の権利を保持すると宣言し、男性2人、女性5人からなる全員のメンバーで、次の日曜日の夜彼女の家に集合して愛の談義を再開しようと提案している⁵⁾ ことから明らかである。

7人のメンバーは第一夜の到来が待ちきれず、日曜日になると朝早くか

ピエトロ・フォルティエニ『初心者たちの楽しき愛の夜』の輪郭

ら教会に参る。さらに午後になると女性達はアウレリアの家に集まり、聖母マリア・イン・ポルティコ教会⁶⁾の夕べの祈りに参る途中で、男性達と合流した。夕べの祈りのあと、全員で女主人アウレリアの邸宅に戻り、御馳走を楽しみながら愛の談義を交わした後、『指輪』という五幕物の喜劇を見た。喜劇の後アウレリアは第二夜の女主人にアドリアーナを指名して解散した。なお毎夜または毎朝、『夜』の集会が解散する前には、必ず男性達が女性達全員を自宅に送り届けることになっている。

アドリアーナが提案した翌週の日曜日、前週と同じ教会の夕べの祈りに参列したのち、女主人の広大な邸宅を見物する。洞穴の下の泉の前で、女主人に指名されたコンスタンシオが『夜』の最初のノヴェッラ（要約参照）を語る。続いて一同は豪勢な晚餐を済ませて再び戸外の席に戻り、女主人が提供した五幕物の喜劇『ラヴィニア』を見る。その後アドリアーナは次の女主人にコリンツィアを指名して解散した。

コリンツィアが第三夜の開始を次の木曜日の正午に指定したので、一同はその時刻にコリンツィア邸に集まり、邸内の美しい庭園を案内されて花の咲き乱れる中で、コンスタンシオが女主人の求めに応じ、リュートの伴奏で8行スタンツァを8連と11行のカンツォネッタを歌うと、アウレリアが11行のカンツォネッタ、イポリトが10行と14行のカンツォネッタ、アドリアーナが30行のカンツォネを歌う。コリンツィアが皆を広間に案内すると、コントラバスの伴奏と共に一幕物の喜劇『鰻』が上演される。喜劇が終わると同時に、御馳走が持ち込まれて、食事とおしゃべりが始まる。その時美しい容姿と高貴な家柄に恵まれた4人の若者が一座に加わり、その一人が弾くりュートに合わせてダンスが始まる。女性達は新しいメンバーと語り合い、4人は仲間に加わる。女主人はこのまま徹夜で語り明かそうと提案し、イポリトに何かゲームを主宰するよう求めた。そこでイポリトは「私の庭園にどんな植物を贈ってくれますか」とたずねて、それに対

する返答とその理由を判定するゲームを開始した。女性達はその問答の中で、口々にイポリトの浮気な性格を皮肉る。その途中でフルジダが女主人の求めに応じクラヴィチェンバロの伴奏で10, 11, 15行のカンツォネッタを歌う。新入りのドリコがイポリトの問いにキャベツと答えたために、女性達が不適當だと判定して辛辣にからかう。問答の途中で新入りのポンポニオから、『日々』で語られたようなノヴェッラを求められた女主人は、『夜』の二番目のノヴェッラ（要約参照）を語る。

女主人コリンツィアのノヴェッラの後、イポリトのゲームが再開され、その問答で新入りの一人フィロテオが冴えた返答をしたので、イポリトが女主人の許可を得て褒美として特権を与えようとする、フィロテオはその特権の代わりに、この集まりに最後まで止まる許可を求める。その結果先程イポリトとの問答に失敗したドリコを除く、フィロテオ、パンフィロ、ポンポニオという3人の青年が新しく仲間に加わることになる。こうして正式のメンバーは、男女各5人の計10人となる。『デカメロン』では男性3人女性7人なので構成こそ異なるが、総数の点では『デカメロン』と同じとなる。女主人は次の主人役にイポリトを指名した後、ドリコに大型のチェトラの伴奏を命じ、皆がそれに合わせて踊る。朝のミサの鐘でダンスが終わり、コリンツィアは軽食を提供し、ドリコに「特色ある歌」8行を歌わせて徹夜の集いを終了し解散した。

第四夜の主人となったイポリトは、前の集いが解散した翌日の土曜日の午後、下男の使いを通して、新メンバーを加えた10人全員を、翌日曜日の自宅の集いに招待した。例のごとく全員はイポリト邸に集まった後、男女別々にいつもの教会の夕べの祈りに参列した。教会から出て来た一同を待っていたドリコがイポリトを主人扱いして彼を怒らせたが、女性達と相談してドリコがその夜の集いに出席することを許す。その後イポリトの豪華な邸内の様子や豪勢な饗宴と農夫や司祭に扮した若者達が次々と交替して

ピエトロ・フォルティエニ『初心者たちの楽しき愛の夜』の輪郭

歌う余興の歌の数々（例にならって行数を示すと、8×9, 11, 30, 26, 14+3, 14+3, 14+3, 8, 8, 8, 8, 8, 56, 8, 16, 8, 8, 8, 8, 8, 8, 16, 8, 8, 9, 9, 8×4）の説明が延々と続く。イポリト邸では例外的に全員が完全に受け身となり、邸内を見学し、食べ切れない御馳走を味わい、プロの芸人らしい人々の歌を楽しんだ後に解散する。

イポリトから第五夜の女主人の花冠を引き継いだエミリアは、次の木曜日に使いを出したので、10人はその翌日の金曜日の午後エミリアの邸宅に集まる。優雅な庭園のダイダイの林の陰で、女主人の提案に従い会員達がリュートを弾いて歌う。イポリト（17, 7, 9）、アドリアーナ（10, 9, 6）、パンフィロ（12, 13, 14, 13）、ポンポニオ（11）、コンスタンシオ（17, 14, 11、彼は最初ののカンツォネッタを歌う前の挨拶で、コリンツィアとエミリアにならって自分も世を捨てる、と宣言して皆を驚かす）の順に歌うと日が暮れたので、女主人は一同をボローニャの大聖堂、聖ペトロニオ教会が描かれた広間に案内する。晚餐とともにボローニャを舞台とする五幕物の『コンメディア』が始まる。劇が終わると半時間音楽が演奏され、エミリアがフルジダに花冠を渡して解散する。

第六夜の女主人に任命されたフルジダは、次の金曜日の朝皆が軽食を済ませたころ、召使に全メンバーを集合させる。予想外の短時間で皆はフルジダ邸に集合し、フルジダは広場のダイダイとライムが描かれた背もたれに掛けた全員に、ノヴェッラの会を再開したいと述べ、新人のポンポニオに花冠をかぶせ、明日のノヴェッラの会の主宰者に任命した。ポンポニオはフルジダの代官役を引き受けることを快諾し、明朝のミサが終わり次第自分の家で昼と夜の集いを続けて開催することを予告して解散する。

その翌日のノヴェッラ第一日目の土曜日の朝、一同はシエナのドゥオモのミサに出席した後、ポンポニオの家に集まり、花が飾られた部屋で軽食を取った後、美しい庭園に移る。ポンポニオの挨拶に続き、その指名を受

けたコリンツィア以下10人のメンバー全員が第一日目のノヴェッラを語る。

(要約参照) 全員の話が終わると、夕食までの間慣例通りカンツォーネを歌おうと主人役のポンポニオが提案して、歌い手を指名、リュートの伴奏でコリンツィア(8)、コンスタンシオ(11, 24, 14)、アドリアーナ(10)と歌った後、ポンポニオが一同を広間に案内して、第六夜の五幕物の喜劇『ガラテア』が上演される。劇が終わると夜が明け始める。ポンポニオはパンフィロに花冠を渡す。フルジダの下で次の日の主人となるパンフィロが挨拶した後に解散する。

ノヴェッラ第二日目の日曜日、太陽が中天に近付くころパンフィロは目を覚まして、召使達に全メンバーを自宅に招集させる。全員は広間から庭園を抜けて、小さな教会のミサに参列し、八角の壁に囲まれた庭園内の彫像や噴水や男女像の列柱を楽しんだ後に、豪華な大広間に入り、歌と演奏入りで豊富な御馳走を味わった。パンフィロは日が中天に達したころ、涼しい所へ行こうと提案し、ロッジャやいくつかの庭園や草原を抜けて、頑丈な壁に囲まれ、植物の生け垣に遮られて無数の鳥が戯れる、迷路のような庭園の奥の洞窟の前の草の上に横たわる。パンフィロは最初の語り手にイポリトを指名。イポリトと女性達の間答の後、第二日目のノヴェッラが語られる。(要約参照)

全員が語り終わると、パンフィロが挨拶した後に歌を所望したので、コンスタンシオはリュートを弾きながら14行のソネットに続いて、8, 7, 7行のカンツォネッタを歌った。皆が褒めると彼はさらに14, 15, 14, 14行と歌い続けて沈黙した。日が暮れたので、パンフィロは皆を建物に導き、広間に案内して晚餐が始まる。たっぷり4時間かけて食事とデザートを楽しんだ後、パンフィロは別の大広間に皆を連れて行くと、そこには舞台が用意されていて、4台のコントラバスの演奏と共に第七夜的一幕物の『コンメディア』が始まる。喜劇が終わるとパンフィロは皆にその感想を聞いて

ピエトロ・フォルティニー『初心者たちの楽しき愛の夜』の輪郭

た後、4人の若者に歌で皆を楽しませるように命じる。すると4人はコンスタンシオに歌の主題を選ぶ権利を与え、彼が先に歌い始めると4人がそれに続き、各13行のカンツォネッタが続けて4つ歌われた。パンフィロは主人役の花冠をフィロテオに引き渡し、彼が挨拶した後解散した。

ノヴェッラ第三日目の月曜日、太陽が中天に近付いたころ、フィロテオは召使を各メンバーの家にやって招集する。広間に集まり小さな教会のミサに出た後、小さなトキワガシの森でしばらくしゃべった後、立派な館に入り螺旋階段を上って豪華な広間に入り、多種多様な魚料理を味わう。食事がほぼ終わったころ、一団の青年が銀の皿に雪を盛って登場し、女性の胸に向けて雪を投げ、女性達が反撃してしばらく雪合戦が続く⁷⁾。その場にフィロテオの美しい妹が現れると、若者たちはその美しさに圧倒されて、雪合戦に少女を誘う52行もの歌を歌う。婦人達はこの暑い時期に雪を見て驚き、遠い山から早馬で運ばせたものだと知る。雪が溶けると歌も終わり、続いて15分間コントラバスとフルートの演奏が続く。音楽のあとフィロテオを一同を壁で囲まれた300パツソ（1パツソは1.5～2m）四方のダイダイ林に案内する。各壁面には各10個の壁龕が据えられ、それぞれにギリシャの神々や英雄から美徳や観念のアレゴリーそして聖書の人物までが、生きているように描かれていて見る人を圧倒した。主人はさらに一行を森に案内し、養魚池の泉のそばの草の上に座って、第三日目のノヴェッラが語られる。（要約参照）

一同が話し終わると、フィロテオは自分が話した最後のノヴェッラの結末が悲しかったので気分を変えたいと言って召使に豎琴を持って来させ、コンスタンシオに変わらぬ愛の歌を歌うように頼むと、コンスタンシオは各8行のスタンツァを立て続けに42連も歌った後に、最後の7行で締めくくったところで作品は中断している。これまでの例では、歌が終わった後で主人役が何らかの挨拶をしているので、ここでもコンスタンシオの一連

の長いスタンツァだけで作品全体が終わることはあり得ない、と思われる。だからこの作品は未完のまま中断していると判断せざるを得ない。しかし未完だとは言え、三日分のノヴェッラが語り終られているので、この作品がすでに末尾の直前まで書かれていて、これがほぼ全体に近いと考えても差し支えなさそうである。

以上の構成を眺めると、『夜』は『日々』の続編として書かれながら、大きく変化していることが分かる。それを端的に示しているのは、両作品における構成要素の比率の違いである。『日々』を紹介した際、筆者は何の疑問の余地もなく、『デカメロン』の延長上に位置するノヴェッラ集の一つとしてそれを論じた。事実全877ページの内、純粋にノヴェッラを記したページが689ページで、全体の78.56%に達していて、第六日のように大半は詩で成り立っていて、全くノヴェッラが語られない日があったにもかかわらず、ほぼ8割までがノヴェッラでできていて、それ以外はかなり数のカンツォーネやカンツォネッタ、スタンツァ、ソネットなどを含む額縁の部分だと見なすことができるからである。

ところが『夜』の場合には、全体に対する比率だけを取り上げると、もはやこの作品は到底ノヴェッラ集とは呼び難いことが分かる。すなわち全体1340ページの内、純粋にノヴェッラを扱っているのはわずか343ページ(25.60%)、かろうじて全体の4分の1に達しているに過ぎないからである。では作品の中で量的に主要な役割を果たしているのはなにかと言えば、6篇の喜劇なのである。その量は全部加えると617ページ(46.04%)に達し、全体の半ば近くを占めている。残りの380ページ(28.36%)が多くのカンツォーネ類を含む額縁で、その部分の方がノヴェッラよりも大きな比率を占めている。量的には、ノヴェッラは劇と額縁に続く第三位に過ぎないのである。

だから少なくとも構成要素の比率から見ると、この作品はノヴェッラ

ピエトロ・フォルティニ『初心者たちの楽しき愛の夜』の輪郭

集というよりも、喜劇集と言った方が実情に近い。だがはたしてそう呼ぶべきかとなると、筆者は大いに疑問を感じざるを得ない。まず喜劇は、多くの登場人物がかかわすかなり取り留めもないせりふで出来上がっていて、あまりにも密度が薄く、ページ数が内容に比して大き過ぎる。たとえば『ラヴィニア』や『鰻』などは、『日々』のノヴェッラの一つを脚色したもの⁸⁾だが、多少別のエピソードを加えているとは言え、元の作品の10倍以上に引き伸ばされている。そして他の作品の場合でも、たとえば『指輪』の中の誤って恋人とは別人のベッドにもぐりこむ話のように、『日々』のノヴェッラのエピソードを適当につなぎあわせたという感じの作品が多い。それらはあくまで招待客相手の余興であり、多くの場合背後に素材となったノヴェッラが透けて見えていて、最後に語られるノヴェッラの前座と見なすべき存在である。

むしろ後で示す通り、多くのカンツォーネ類を含む額縁の部分の異様な存在感の方が、喜劇の部分に較べると、はるかに中身が濃いように思われる。ことに腕利きの料理頭が登場して、多数の鳥や獣の肉を調理して、とても食べ切れない量の御馳走を振る舞い、その後で農夫に扮したプロの芸人らしき一団が卑猥な歌を歌いまくる、自他ともに認める好色なホスト、イポリトが主宰する第四夜のもてなしぶりなどは、バフチンが指摘したラブレールの世界を彷彿させるものである⁹⁾。それに比べると、この作品のノヴェッラの大半は、量的のみならず、質的にも影が薄いことは否定できない。したがってこの作品は、額縁の部分がやたらと発達し過ぎたために、メインの部分が希薄になり、何が主役なのか分からなくなってしまった奇妙な作品だと言わざるを得ないであろう。本来はノヴェッラ集として書かれるはずであったが、作者にはそれ以上に力をこめて書きたい事柄が別にあったのである。そうした事柄が、額縁や実は額縁の一部に過ぎない喜劇として異常に肥大した結果生まれたのがこの作品なのである。こうした奇

妙な結果は、実はこの時代の市民の願望を忠実に反映していたと言えそうである。幸い20世紀に生まれたバフチンやロペスの新しいルネサンス解釈¹⁰⁾のおかげで、私達はこの奇怪な作品を解釈する有力な手掛かりを有している。逆に私達はこの作品によって、ロペスの理論の一つの具体的な例証を見出すことが可能になったとさえ言えるであろう。紙数に限りがあるので、この問題は引き続き別の機会に論じることにする。

第二章 作品の舞台設定

前章の説明によって、この作品が『日々』のような単純なノヴェッラ集ではないことが明らかになったが、では6篇の喜劇と全31篇（第二夜と第三夜に各1話（各々ⅡとⅢと表記）ずつ語られた後に、10人が3日間語っているので32篇となるはずだが、第23話は大部分欠落しているので除外）のノヴェッラがどのような時代と場所に設定されているであろうか。

喜劇ではノヴェッラのように一々時代についての言及がなされていないのだが、『日々』のノヴェッラをかなり忠実に脚色した作品が二つあり、その原作がいずれも近年に起こった出来事として語られていたという事実や、他の作品もほぼ類似の喜劇であることを考慮すると、すべて近年の事件として設定されていると見なし得るであろう。

一方ノヴェッラの場合は、『日々』の場合とほぼ同じことばで時代を示している。

すなわち ① non è (ancora) molto tempo: I-1, I-2, I-7, II-12, III-25, non molto tempo fu: II (第二夜のノヴェッラ), I-4, non molto tempo fa: II-14, ② non sonno passati molti giorni: I-3, I-9, II-13, II-16, III-21, III-24, non sonno (ancora) molti giorni: III (第三夜のノヴェッラ), III-22, ③ non sono (ancora) molti anni: II-11, II-17, II-18, III-29, のように、その大半は non と tempo, giorno, anno の3語を組み合わせた形で、最近もしくは近年の

ピエトロ・フォルティニ『初心者たちの楽しき愛の夜』の輪郭

出来事だと示している。

時には *a li giorni passati*: I-10, II-15, II-19, *a di passati*: II-20 のように *non* を用いずに記されていることもあり、その場合の *passato* は一応 *scorso* (直前の) の意味とも *nel passato lontano* (遠い昔) の意味とも取れるが、内容的には他の *ノヴェツラ* と同様に前者の意味なので、*non* の有無は意味を持たない。それ以外には、*mi pare.. l'altro ieri*: III-28, *l'anno passato*: I-8 など、あるいは *oggi*: I-6 や *ora*: I-5, III-26 などほとんど無意味に近い表現で時期を示しているもの: III-27, III-30 がある。いずれの場合もすべて作者と同時代の事柄であり、さらにその大半はほんの最近の事柄を扱っていると考えることが最も妥当であり、そうした時代設定は『日々』の場合と全く同様である。

それでは、喜劇や *ノヴェツラ* の舞台はどの都市に設定されているであろうか。

まず喜劇の場合は、『指輪』がシエナ、『ラヴィニア』がシエナの近郊、『鰻』がペルージャ、最初の『コンメディア』がボローニャ、『ガラテア』がフィレンツェ、二番目の『コンメディア』がローマに舞台が設定されている。たしかに近郊を含めたシエナの比重は大きいけれども、圧倒的と言えるほどではない。フィレンツェは当然入っているが、ローマをはじめボローニャ、ペルージャと、建前上の教会国家内にある都市が占める比率が大きいことが注目される。

この作品に含まれた31篇の *ノヴェツラ* の舞台は、以下の通りである。まず一箇所のみを舞台とするもの。

シエナ: III, I-5, I-7, II-15, II-20, III-27, III-28 (計 7 篇, 22.58%)

シエナ領域内または近在の小都市: グロッセート: I-2, I-3, コツレ・デイ・ヴァル・デルサ: III-21, ピティリアーノ: II-17 (計 4 篇, 12.90%)

ローマ: I-6, I-9, II-13, II-14, II-19, III-24, III-26 (計 7 篇, 22.58%)

ボローニャ：II, I-4 (計 2 篇, 6.45%), ナポリ：I-10, II-12 (計 2 篇, 6.45%)

フィレンツェ：II-16 (3.23%), ミラノ：II-18 (3.23%), パドヴァ：III-25 (3.23%)

スポレート：III-29 (3.23%), スペインのアヴィラ：I-8 (3.23%)

二箇所を舞台とするもの。

シエナとその近郊：I-1 (3.23%)：フィレンツェとその近郊：II-11, III-22 (計 2 篇, 6.45%) ルッカとその領域部：III-30 (3.23%)

以上の数字を『日々』のそれと比較すると、シエナの都市部の比率はほとんど変わらないが、領域部と近在の小都市の比率が元の約3分の1にまで減少しているので、『日々』では6割余りを占めていたシエナ関連の比率が、2割以上落ちて37.81%にまで低下している。シエナにとって目の上のたんこぶであるフィレンツェの比率が意外に低いのは『日々』と同様であるが、『日々』ではシエナが断然トップの座を占めて、それに続くボローニャやフェルラーラはせいぜい6%に過ぎなかったのに、『夜』ではローマがシエナの都市部と同数の7話、つまり全体の2割あまりを占めて、大躍進を遂げている。要するに『日々』でシエナの領域部の小都市が占めていた比率の内、『夜』において低下した約2割はそっくりそのままローマに移動しているのである。また1例とはいえ、スペインの都市が入っている点も注目に値する。結局『日々』において主にシエナとその周辺部に向けられていた作者の関心の一部が、『夜』ではローマと世界に移されたことがこの変化を齎したのである。

第三章 登場人物の階層と出身地

まず6篇の喜劇について眺めると、喜劇の場合ノヴェツァとは基本的な条件が異なっていることを認めなければならない。この時代の喜劇を成立

ピエトロ・フォルティエニ『初心者たちの楽しき愛の夜』の輪郭

させるのには民衆Pの存在は不可欠で、貴族Nのみあるいは聖職者Rのみでは、喜劇は存在し難いようである。『指輪』は貴族同士の恋愛関係と、聖職者と娼婦の騙し合いという二つの主題がからみあっているのでN+P+Rとなる。『ラヴィニア』は元のノヴェッラよりも筋書が複雑になり、結末も正反対だが、民衆が貴族をペテンにかけ損ねる話なのでP+Nである。『鰻』は修道士と良家の夫人との関係が中心だが、召使や商人らの役割も重要なのでN+R+Pである。第五夜の『コンメディア』は2人の貴族の青年が貴族の娘達と結婚する話だが、居候や修道士も重要な役割を演じているので、N+P+Rとなる。『ガラテア』は貴族の娘の結婚を扱っているが、その恋人は身分が下だし、継母の浮気の相手である修道院長の役割も重要なので、やはりN+P+Rである。第七夜の『コンメディア』は、ローマに来たシエナの貴族の青年と娼婦、および二人の仲に嫉妬する家庭教師の話なので、N+Pとなる。結局どの劇でも貴族の存在が不可欠かつ重要である。作者のフォルティエニ自身は貴族より少し下の上層市民であったが、劇中の重要人物の大半は貴族である。

では『夜』のノヴェッラの場合の階層はどうか。何度も記したとおり、イタリアのコムーネでは聖職者Rを除いた貴族Nと民衆Pとの識別は、時には甚だ困難であるが、やはりノヴェッラ集の性格を捉えるためには有効な手掛かりなので、あえて分類しておく。

P : III, I-1 (計2篇6.45%)

N : I-6, I-10, II-12, II-15, III-27, III-29, III-30 (計7篇22.58%)

R : なし

P+N : II, I-2, I-4, I-8, I-9, II-11, II-14, II-17, II-19, III-25, III-26 (計11篇35.48%)

P+R : I-3, I-5, II-20, III-28 (計4篇12.90%)

N+R : I-7, II-16, II-18, III-21, III-22, III-24 (計6篇19.35%)

P+N+R：II-13 (3.23%)

以上の結果に基づき、ミックスしている場合も含めて、各階層の関与の比率を、最も単純に足し算で表すと以下のような数字が出てくる。

$$P=6.45+35.48+12.90+3.23=58.06$$

$$N=22.58+35.48+19.35+3.23=80.64$$

$$R=0+12.90+19.35+3.23=35.48$$

先程6篇の喜劇において見た貴族重視の姿勢が、31篇のノヴェッラの場合にもはっきりと現れていることが、以上の数字によって明らかである。N関連の総和が、P関連の総和よりも22%も大きいのであるから、いかに『夜』のノヴェッラでは貴族が重要な役割を占めているかが分かるはずである。本論ではくわしく論じることはできないが、実は私のこれまで調べてきた結果を振り返って見ても、イタリアのノヴェッラ集において、貴族関連のノヴェッラの比率が民衆関連の比率をこれほど上回ることは珍しい事例のように思われる。ちなみにこの作品の前篇に当たる『日々』の場合を調べると、P関連の比率の和は87.75%に達し、N関連の比率の和の55.1%よりも3割以上も大きな比率を占めていたのである¹¹⁾。なおここではR関連の比率の総和は26.53%であった。要するにこうした数字から、『夜』という作品がその前篇と見なし得る『日々』に比べても、著しく貴族への関心の高い作品であることが明らかに見て取れるのである。そしてこのことは、『日々』の額縁ではまだそれほど顕著ではなく、まさにこの作品の額縁において初めて顕著に現れる、建物や庭園や庭園内の美術品や鳥や獣への強い関心と、偏執狂的とさえ言えそうなそれらのくわしい描写などの特徴と恐らく無関係ではあり得ない事柄なのである。

さらに登場人物の出身地を調べてみると、まず6篇の喜劇の場合、『指輪』と『ラヴィニア』はシエナ人同士、『鰻』はペルージャ人、第五夜の『コンメディア』はボローニャ人、『ガラテア』はフィレンツェ人と、

ピエトロ・フォルティエニ『初心者たちの楽しき愛の夜』の輪郭

ほぼ舞台設定のご当地の市民がその主要な登場人物となっている。ただ第七夜の『コンメディア』のみは、ローマを舞台にしながらもシエナ人仲間とローマの高級娼婦（ローマ人と見なしておく）とのドラマである。

ノヴェッラの場合の登場人物の出身地は以下の通りである。

単一コムーネ出身者のノヴェッラ

シエナ（郊外も含む）人：III, I-1, II-20, III-28（計4篇12.9%）、シエナ領域部および近在の都市：コッレ・ディ・ヴァルデルサ人：III-21, ピティリアーノ人：II-17（計2篇3.23%）

ローマ人：I-6, II-19, III-24（計3篇9.68%）：フィレンツェ人：II-16, III-22（計2篇6.45%）、ボローニャ人：I-4（3.23%）、ナポリ人：I-10（3.23%）、スペインのアヴィラ人：I-8（3.23%）

複数のコムーネまたは国の出身者

シエナ人＋グロッセート人：I-2, I-3（計2篇6.45%）、シエナ人＋フィレンツェ人：II-11, II-14（計2篇6.45%）、シエナ人＋ルッカ人：II-15, III-30（計2篇6.45%）、シエナ人＋ナポリ人：I-7, II-12（計2篇6.45%）、シエナ人＋ローマ人：III-26（3.23%）、シエナ人＋ローマ人＋スペイン人：II-13（3.23%）、シエナ人＋ミラノ人＋スペイン人：III-27（3.23%）、シエナ人＋マルケ人＋スポレート人：I-5（3.23%）

スポレート人＋ルッカ人：III-29（3.23%）、ローマ人＋スペイン人：I-9（3.23%）、ミラノ人＋スペイン人：II-18（3.23%）、ボローニャ人＋ユダヤ人：II（3.23%）、パドヴァ人＋外国人：III-25（3.23%）

以上のリストに基づいて出身地別のランキングを作ると次の通りになる。

I：シエナ人：III, 1-1, 1-2, 1-3, I-5, I-7, II-11, II-12, II-13, II-14, II-15, II-20, III-26, III-27, III-28, III-30（計16篇51.61%）：それに領域部や近在の都市の住民：III-21, II-17（計2篇6.45%）を加えると約6割（計18篇58.06

%)となるが、後者を同一都市の住民だと考えるのは無理なようである。

Ⅱ：ローマ人：I-6, I-9, II-13, II-19, III-24, III-26 (計6篇19.35%)

Ⅲ：スペイン人：I-8, I-9, II-13, II-18, III-27 (計5篇16.13%)

Ⅳ：フィレンツェ人：II-11, II-14, II-16-III-22 (計4篇12.95%)

Ⅴ：ルッカ人：II-15, III-29, III-30 (計3篇9.68%)

Ⅵ：ナポリ人：I-7, I-10, II-12 (計3篇9.68%)

Ⅶ：2篇に登場するコムーネ民。ただし作品番号は省略する。ボローニヤ人、グロッセート人、ミラノ人、スポレート人

1篇だけに関係する人々の出身地については省略することにして、上記の結果を眺めると、予想に違わずシエナ人の数が抜群に多く、二位のローマ人との間に3割以上の差をつけている。この点は『日々』とも共通しているが、ローマ人の数が二位にまで延びているところが『日々』との最も大きな違いである。これは第二章で見た、ノヴェッラの舞台として突然ローマが大幅に伸びたことと関連している。ローマではその市民同士が関係しているだけではなく、シエナからやって来た若者達がローマの民衆と関係する場所でもあった。また数はさして多くないが、スペイン人が三位に入っていることも、この作品の『日々』離れの現われである。この作品には『日々』よりもさらにはっきりした形で、スペイン人とローマ教会が主導権を握ったこの時代のイタリアの姿が反映しているのである。

第四章 作品の内容と他作品との関連

この作品の前篇『日々』を紹介した際、全部で49篇のノヴェッラの内、性行為をメインの関心とする作品が33篇、実にローマ教皇選出における際のネックとされている3分の2をこえる67.35%にまで達していて、その内のちょうど3分の2にあたる22篇が不倫行為であること、また作品のメインの関心とはしていなくても、未遂をも含めて性行為が記述されている

ものが13篇、性に関する冗談が1篇に及んでいて、性的関心は無縁な作品はわずかに2篇にすぎないこと、それらはいずれもスカトロロジー的作品であることを示しておいた¹²⁾。第一章で見たとおり、古いメンバーをそのまま引き継いだ上に、新しい男性メンバーを3人加えた『夜』の場合、果してその内容はどうかであろうか。少なくともタイトルから判断するかぎり、昼間を意味する『日々』よりも、直訳すると「快樂的な夜」という意味の続篇の方が、性的な密度はさらに高まっていると予想されるはずである。果してそんなことが可能であろうか。

多少恣意的な選択を行わざるを得ないが、以下は『夜』における性的テーマの頻度である。＊印は不倫関係、☆印は未遂、●印はスカトロロジー的なものを表す。

性行為をメインの関心とするもの：I-2＊、I-3、I-4☆、I-6、I-8＊、I-10、II-11＊、II-18、III-21、III-25＊、III-26（計11篇35.48％）

メインの関心ではないが性行為が重要な意味を有するもの：II、I-9、II-14＊、II-16＊、II-20、III-22☆、III-24＊☆、III-27＊、III-28＊☆●（計9篇29.03％）

性行為とは関係が薄いもの：III、I-1、I-5、I-7、II-12、II-13●、II-15、II-17、II-19、III-29、III-30（計11篇35.48％）

以上の結果から明らかなとおり、一見享樂的なタイトルを付けているにもかかわらず、少なくともノヴェッラで語られている性的快樂に関しては、『夜』は『日々』よりもはるかに濃度が薄まっている。少なくとも『日々』では最高の快樂と見なされていた性的な快樂に関しては、全体の3分の1以上のノヴェッラが、それとは関係のない事柄を語っていて、明らかにその集中度が低下していると思わざるを得ないのである。

しかしそれでは『夜』のタイトルが完全な欺瞞かどうかとなると、簡単には断定できない。何故ならそれぞれの夜の主宰者が、訪問したメンバー

に対して提供しているサービスは、『夜』の方がはるかに充実しているからで、集いが開かれる度に豪邸内の美しい庭園や宮殿内を案内された後に、山海の珍味がもてなされ、喜劇が上演され、時にはプロの歌手とおぼしき人々の声まで楽しめるわけだから、ノヴェッラを中心とした『日々』の毎日と比較して、参加者の楽しさが希薄になっているとは断言し得ないからである。そうしたもてなしの圧巻は、メンバー中の異端児であることを自他ともに認めているイポリトが主宰する第四夜のもてなしである。その宴会の様子は、二十世紀にバフチンが改めて指摘した、フォルティーニのまさに同時代人であるラブレーの豊饒さのイタリア版とも呼び得る、果てしない料理の羅列によって我々淡泊な日本人を圧倒する。残念ながら筆者にはその内容を正確に紹介することすら困難なので、とりあえず料理に用いられた動物や食品の名前だけを、重複している場合も省略せずに列挙しておく。

ノウサギ、ワカドリ、ハト、ニワトリ、鶏卵、コウシ、去勢オンドリ、コヤギ、ポローニャ・ソーセージ、去勢オンドリ、ニワトリ、鶏卵、ハト、クジャク、去勢オンドリ、ニワムシクイ、ワカドリ、鶏卵、生きた小鳥（パイの中から飛び去るが、そんなことが可能だろうか）、雌のコウシ、キノドアオジ、キジバト、コヤギ、ニワトリ（の肝臓）、ウサギ。

大したことないじゃないかと言うグルメの方もいるかも知れないが、ここではさすがにキジバトあたりから誰も手を出せなくなったと記されている。食材が重複しているのは、凝ったソースの材料でもあるからだが、次々と現れるこうした動物を客の前で巧みにさばいている料理頭の姿は貫禄十分で、異端児のイポリトでさえ影が薄くなるほどである。貴族の邸内の日常生活では、料理頭の方が主人の貴族よりも信望を集めていた可能性が感じられる。

最後に出典を含む他の作品の主な作者との関連を眺めておくと、以下の

ピエトロ・フォルティエニ『初心者たちの楽しき愛の夜』の輪郭

通りである。

①ボッカッチョ：II, I-1, I-2, I-3, I-7, II-13, II-14, II-17, III-22, III-24, III-28 (計11篇35.48%) ②デッリ・アリエンティ：I-1, I-2, I-5, III-22, III-24, III-25 (計6篇19.35%) ③バンデッロ：I-3, I-10, II-20, III-22, III-2 (計5篇16.12%) ④グラッツィーニ I-1, II-11, II-13, III-22, III-24 (計5篇16.12%) ⑤セルカンビ：I-1, III-22, III-24, III-28 (計4篇12.9%) ⑥ストラパローラ：II-14, II-16, III-28, III-29 (計4篇12.9%) ⑦マズッチョ・サレルニターニ：II, I-10, II-13 (計3篇9.68%) ⑧フィレンツォーラ：II-11, III-22, III-24 (計3篇9.68%) ⑨セルミーニ：I-2, I-4 (計2篇6.45%) ⑩ブラッチョリーニ：I-1, II-18 (計2篇6.45%) ⑪モルリーニ：I-1, II-16 (計2篇6.45%) ⑫ドーニ：I-1, I-9 (計2篇6.45%) ⑬マルグリット・ド・ナヴァーラ：II-16, III-25 (計2篇6.45%)

以上が出典作者のベスト13であり、それ以下に1篇(3.23%)だけの作者達が続く。サッケッティ：I-5, ピッコローミニ：III-30, パラボスコ：II-11, イアコモ・サルヴィ：II-17, ドゥ・ラ・サル：II-18, ファブリオー：I-1 (各3.23%)

以上の表から、この作品においてフォルティエニは、『日々』に見られたセルカンビに代表されるトスカーナの土着的要素からやや離れて、ボッカッチョやバンデッロなど、イタリアのノヴェッラの本流とも言える作者達と共通の基盤に立って創作活動を進めたことが分かる。以下の数字もフォルティエニのこの時期の姿勢を知るために重要である。

実話と出典なし：III, I-6, I-8, II-12, II-15, II-19, III-21, III-26, III-27 (計9篇29.03%)

付録：ノヴェッラの要約

第二夜のノヴェッラ (語り手コスタンツァ) 近年のボローニャで、裕福

なユダヤ人マエストロ・ラファエッロに娘が生まれ、熱心に教育すると10歳で25歳の男性以上の学問を修め、美貌にも恵まれて評判になる。15歳のころ、彼女に恋した裕福な地元の青年貴族が、彼女の家の前の空き地で、リュートの伴奏で歌を歌って彼女の心を掴む。若者は金と絹でできたハンカチに16スクード包んで空き地に落とす。娘はハンカチを拾い、若者に返すために彼と言葉を交わし、高い塀の庭に通じる門の穴越しに交際を始める。娘が妊娠し、母が問い詰めるが、娘は何も知らぬ振りをする。母は娘が処女のまま懐胎したと信じ、神学者の父までがそう信じて、ポローニャのユダヤ人全員に、娘が新しい救世主を生むことを伝える。イタリア全土のユダヤ人にも伝わり、シナゴグで8日間祈るなどの騒ぎとなる。4人の使者によって世界中に奇跡を伝えさせると、女子が誕生して皆がっかりする。恋人から事情を聞いた若者は、赤ちゃんを自宅に連れ戻って洗礼を受けさせ、自分の子供として育てる。恋人も連れ出してキリスト教に改宗させ、本人の希望で修道院に入れる。若者は他の女と結婚したが子供が生まれず、ユダヤ人の娘が生んだ娘が相続人となった。

第三夜のノヴェッラ（語り手コリンツィア）シエナの愚かな平民の画家パキアロットがコムーネの主君になることを夢見る。自宅の広間を元老院に見たてて、人々の顔を描きその真ん中で君主気取りで暮らす。同じような馬鹿者たちに考えを打ち明け、「あらゆる良き習俗の敵」マキアヴェツリの助言に基づいて論じ合う。たまたまそのころイタリアとシエナに飢饉が発生して、パンの値段が騰貴。馬鹿はチャンス到来と考えて、日曜日の夜人々が飲んだくれてる時に考えを表明し、サン・フランチェスコ教会に同様な馬鹿を総勢400人も集めて、その時期の政府の要人達を殺して政権を奪い取る相談をする。そのニュースはすぐ政府の要人の一人の耳に入る。彼は危険を感じて、彼らに会いに行きその誤りを叱る。パキアロットは腹を立ててさらに熱狂、同じように愚かな若者バルドッティと意気投合

ピエトロ・フォルティニ『初心者たちの楽しき愛の夜』の輪郭

し、二人はフォンテブランダの若者の家の地下室で酒を飲んで議会ごっこをするが、女中が盗み聞きして彼らの問答を老主人に伝える。老主人が市政府に訴えると、当局は反逆者たちに出頭を命じる。若者はすぐ出頭するが役所に入って恐怖に取り憑つかれ、番人が正門から出してくれないので、金の拍車の騎士たちの間をすりぬけて裏口から逃走。たまたま出会ったパキアロットの問いに「縛り首になるから逃げろ」とのみ答えて、馬にも乗らず門外に出て、フィレンツェに逃亡した。臆病風に襲われた画家もあわてて逃亡し、門外に出て暗くなるころカプリオーラの修道院に着き、院長に追われているので泊めて欲しいと頼む。院長は許可したが、托鉢から戻った修道士らを追っ手だと思って逃亡し、墓地に迷い込み、たまたま15日前に子供が死んだので開いていた墓に苦勞してもぐりこむが、埋葬したばかりの幼児の遺体で顔をかくすと、蛆虫が顔に殺到した。朝修道士たちがお祈りに来た足音を聞いて、悪臭から逃れるため外へ出ようとしたが、墓の石の蓋が上げられず、隙間から必死で叫ぶと、お勤めを終えた修道士らの耳に叫び声が届く。彼らは気味悪がって誰も近付かない。結局修道士全員が、教団長、院長らを先頭に聖水と十字架を掲げて聖歌を歌いながら降りて行き、悪臭に耐えながら墓からパキアロットを助け出して、食事を与えて送り出した。フィレンツェに逃げる途中貴族の従者を見て追っ手だと思って川に飛び込み半時間水につかる。結局フィレンツェに逃げ込んだが、彼はすべてを失った。

第一日目のノヴェツラ（第六夜の女主人フルジダの代官ボンポニオが自宅でノヴェツラの会を主宰して、語り手を指名する）

I-1（コリンツィアが語る）最近のシエナから遠くないヴァル・デイ・ストローヴェ村でサンティという愚かな農夫が子山羊を売りに行くが、途中で彼に会った二人の若者が、それは子山羊でなく去勢雄鶏だと言い張り、飯屋の亭主ら途中で会った人々がそれに同調し、税関吏までが税金は

子山羊だと3ソルドなのに、去勢雄鶏の1ソルドしか取らない。市内で何も知らぬ女が子山羊を買いたいと言って、サンティの取り巻きに怒鳴られて去る。やがてサンティも次第に去勢雄鶏だと信じ始め、今朝子山羊を売るために彼を送り出した兄に腹を立てる。シエナ屈指の貴族ジロラモ・パルミエーリが値段を尋ね、3リラだと言われて、「お前はもう半分死んでいる」とからかうと、取り巻きたちもそれに同調し、酒を飲ませて彼が重病人だと信じ込ませ、裸にしてジロラモが用意した白装束を着せてベッドに寝かせ、彼が死んだと信じ込ませ、4人の荷物運びに死人として自宅に運ばせる。途中で人が自分の噂をしているのを聞いてサンティが独り言を言うと、運び屋は驚いて彼をほおり出して逃げ帰る。集まって来た人々に彼が自分の埋葬を頼んでいるところを従兄が見付けて、しっかりと縛って、彼の母親の許に連れ帰る。兄が訳を問うと、サンティは自分が死んだから埋葬してくれ、という。兄が棒で殴ると、サンティは起き上がり、去勢雄鶏を子山羊とだました、とつかみ掛かる。皆が割って入りサンティを寝かせる。あとで子山羊の代金と服が届けられ二日後に起き上がって正気にもどるが、もう何も売りにいく気がなくなる。

I-2 (エミリアが語る) 最近のマレンマ地方のグロッセートで、シエナのとても良家の若者がある若い人妻と仲良くなる。彼女の夫が小麦を最近到着した船乗りの商人に売るために出掛けるが、途中でその商人に会ったので、商人と同行している貴族と共に自宅に引き返す。帰宅して小麦倉庫の鍵を取りに寝室に入った夫が、若者と逢い引き中の妻を発見して大声を上げたので、戸口で待っていた商人と貴族も走り込んで二人を発見。夫がポDESTaに訴えると騒ぐと、商人は夫を宥めようとし、貴族も「見まちがいろいろ」と応援し、双子を生んだ人だけが腰痛を治療できるのだから、双子を生んだことがある彼の妻が青年の腰痛を治療していたのだろう、と言う。妻と若者はその言葉をヒントにして立ち直り、若者は治療してもら

いに来たと言ひ、好きなように立派な夫人と自分をポDESTAに訴えよと、夫を罵って立ち去る。夫は自分が見誤ったと信じて震え上がる。妻も夫を罵り、若者を誉めそやす。謝る夫に妻は若者の怖さを語って脅すと、貴族が仲介役を引き受け、夫は貴族と商人と共に若者が仲間という広場へ行く。貴族の仲介の言葉を聞くと、若者が勿体ぶって受け入れる。そこで夫は帽子を脱ぎ、若者の前に膝まづいて謝罪し、若者は夫を許す。後で若者は貴族と商人に感謝し、若い人妻と長く楽しみ続けた。

I-3 (イボリトが語る) やはり最近のグロッセートで、大きな店で菓その他を商いさせている若きシエナ人医者のアニバーレが、深夜に散歩中の神父を見て怪しいと思い、しつこくつきまとう。神父は女と会う約束が果せず(途中かなりの欠落がある)、神父が恰好を付けるためによそを歩き回っている間に、アニバーレが神父の愛人の寝室に入り込む。女は神父と信じて、どうして遅くなったのかと問うが、アニバーレは口をきかずにすることを済ませる。女は今までになく満足して、相手の髭から別人だと悟り、叫ぶと脅かすので、自分も叫ぶと答え、女の疑問に答える途中で、自分の彼女への思いを知っている神父の手引きで家に入ったと嘘をつく。話しているうちに、女は神父よりも若いアニバーレの方が好きになる。朝アニバーレが女の許を去ると、すぐシエナに帰れという知らせが届いたので、直ちに出発して二度と戻らなかった。そんなこととは知らず、女は神父に捨てられたと信じて腹を立て、やって来た神父を罵り続け、二度と来るなど追い払ってしまう。

I-4 (フィロテオが語る) 最近のボローニャの貴族の家で、子供を教えるため家庭教師が雇われるが、貴族の妹の18歳の美しい未亡人から物を贈られた家庭教師は、彼女に恋して賛美の詩を贈る。彗星が現れた時未亡人は12歳の妹と屋根裏に上り、妹を屋根に登らせて家庭教師を誘うが、家庭教師は彗星の話をするばかりで、誘いに気付かず未亡人を怒らせる。

家庭教師は後で未亡人の真意を悟り、後悔して友人に自分を殴らせる。未亡人は家庭教師が渡した手紙を突き返し、怒った家庭教師が辛辣な詩を書くのを見て、兄に訴え、二人で家庭教師の部屋を搜索する。家庭教師は僅かな荷物を持って逃走し、フェルラーラの貴族の許に逃れる。貴族がフランス大使にその話をするると大使は彼が気に入り、ペトラルカの再来とばかり、年俸100スクードの秘書としてフランスへ連れて行く。

I-5 (アドリアーナが語る) 最近のシエナで、博士が教室の近くに屠殺された二頭のブタをぶら下げておくと、マルケの学生達はその腿肉を盗み、神父はそれをけしかけ、さらに2羽の去勢雄鶏と8羽の鶏を盗んで、4つの浅鍋にその肉を入れて、戻ってから食べようと、火を通してもらうためパン屋にあずけ、マルケへと出発する。スポレートの学生から盗みを聞いた博士は腹をたて、その学生にパン屋から浅鍋4杯を自宅に持ち帰らせて、一部はその晩、残りは翌日食べる。マルケから戻って来た学生達は、浅鍋を取りに行き、4杯とも何者かが運び去ったと聞いてパン屋と争うがらちが明かない。学生も神父も嘆いたあげく、ヴィテルボの学生アントーニオが犯人だと信じて殺そうと相談。博士と学生は彼と親しい薬屋を通してアントーニオに警告。喧嘩早いアントーニオは鉄の短い上着を着てマルケの連中に会いに行き、自分は犯人でないといい、喧嘩になる寸前に皆で引き離して仲裁し和解させた。マルケの学生達には犯人が分からず、関係者全員に馬鹿にされた。

I-6 (パンフィロが語る) 最近のローマの若い貴族ムツィオとファブリツィオは大の親友である。ムツィオはローマの富裕な貴族の16歳の美しい娘に恋して、娘もムツィオが気に入る。ムツィオがファブリツィオに相談すると、ファブリツィオは娘の母親に接近して誘惑する。母親は若くて顔も身体も美しいファブリツィオに恋してすぐに関係が生じ、召使の手引で一日に何度も楽しむ。ファブリツィオは娘の母親と喧嘩をして姿を消す。

ピエトロ・フォルティエニ『初心者たちの楽しき愛の夜』の輪郭

彼に夢中の娘の母親は、ムツィオ相手にファブリツィオへの恋を泣いて訴えたので、ムツィオが彼女の夫が留守の時にファブリツィオを連れて来て、二人は和解した。ファブリツィオはムツィオに恩返ししようと提案して、ムツィオと彼女の娘との恋を話したので、母親は同意して夜明け前に娘を約束の庭園へ連れて行く。近くの宮殿には寝室が用意されていて、二組の恋人は楽しんだ。最初は偽りだったファブリツィオの恋もやがて本物の恋となった。

I-7 (コンスタンシオが語る) 最近のシエナに、貧しく吝嗇で無知な、ナポリ人のドミニコ派の修道士が、金持ちの未亡人の子供達の家庭教師に雇われ、ついでに農園の経営も教えると、大学者だと買いかぶられる。本人も大学にも行かずに勝手に医学博士だと名乗り、世界一の名医だと吹聴する。22歳で悪戯好きの貴族クリストーファノ・トロメーイが冬の夜彼の扉をたたき、サント・ガルガーノ大修道院長が気を失って死にかかっている、その父親が呼んでいると言い、勿体振って明朝行くという相手を強引に誘い出す。若者が速足なのでやっとなつて行くと、若者が金貨35スクードと高価な指輪を二個包んだハンカチを落としたと言って、医師を一人で行かせる。大修道院長は毎晩、若い警吏8～10人らと賭博に興じ、4～6人の子供と2人の娼婦がはべっていた。開いていた門から医師は中に入り、賭博に負けてやけになった召使から「何の用だ」と問われて、大修道院長が倒れたと聞いて来た、と答える。主人には肥満以外何の心配もないことを知っている召使は「棒を食らわしてやる」と棒を取りに行く。医師はあわてて逃げ出したが、来た道を忘れて中庭に逃げ込み、石灰を練っている中にはまり、真っ白になって門の外に逃げ出す。召使から医師のことを聞いた大修道院長達は、悪戯の計画を知っていたので、中に案内しなかった召使を叱り半日も棒を食らわせた。クリストーファノは医師が真っ白になって門から出て来るのを見て大笑いした。塀の下にへたりこんでいた医師

は、夜明けの鐘でようやく動きだして帰宅したが、寒さとショックで死にかけて長く外出できなかった。

I-8 (フルジダが語る) 昨年スペインのアヴィラで醜い良家の娘が美男子の若い貴族と結婚した。夫は妻を馬鹿にして奴隷娘を可愛がる。妻は奴隷娘を棒でたたくが、娘は夫の相手をやめない。妻は無関心を装う。油断した夫が日の出2時間後に奴隷娘と寝ている現場を捕え、眠っている二人をベッドに縛り付けて太い綱で夫を鞭打ち始める。夫の悲鳴で人々が駆け付け、夫の親戚の仲介で縛りを解くと今度は奴隷娘を鞭打つ。奴隷娘は裸で逃げ去る。夫の親戚が必死に宥めたので妻は夫や奴隷娘と和解したが、夫は浮気をやめた。

I-9 (アウレリアが語る) 最近のローマにアルベルケ公率いるスペイン人達がやって来た。その中の本物の貴族が娼婦ディオノーラに会いたいと伝えたが、以前スペイン人に騙されたディオノーラは拒否した。翌日も訪れた貴族の使いに、ディオノーラは先に100スクード払わないと家に入れない、と返事させた。貴族は友人に借りた60スクードとあわせた100スクードを持ってディオノーラを訪問した。ディオノーラは召使に先に金を取らせ、今は大物が来ているから2時間後に来るようにと言わせる。ディオノーラは別の召使女にチェーヴォリ銀行へやり、その金をこれまでためた450スクードに加えて預けさせ、その預金の信用でピエトロ・チェーヴォリから500スクードの真珠の首飾りを貰って来させる。スペインの貴族は、豪華な部屋に優しく迎えられ、御馳走が振る舞われた。貴族はディオノーラと寝室に入り、彼女は首飾りを外してテーブルの上に置き、貴族と2度交わる。貴族はその後腹が痛いと便器へ行く振りをして、首飾りから真珠を抜き取り飲み込んでしまう。朝貴族は気分が直ったからとまた2度交わる。首飾りの紛失に気付いた女が騒ぎ、警察の隊長が二人やって来て貴族を調べるが何も出て来ない。女はスペイン人は泥棒だとか互いに庇い

合うとか言って非難したが、貴族は逮捕されない。その噂を聞いてまだ代金を受け取っていなかったチェーヴォリが知事に訴えたので、女はお金を払った。それから4日後スペイン人は真珠を排便し、水で洗い、二人の隊長の許にそれを持って出頭して、女が100スクードを返してくれたら、真珠を返すと言う。女から受けた侮辱の一部を仕返ししてやりたかったからだと理由を説明した。女は喜んで100スクードを返却した。

I-10 (ポンポニオが語る) かつて (a li giorni passati), ナポリで貴族だが高利貸の娘が、兄の友人の高貴な青年に恋して、父が持参金なしで嫁がせるつもりなので悩むが、カーニヴァルに愚かな兄と二人で仮面をかぶり、馬に乗って槍でリングを突き刺す見世物に集まった大群衆の中で、恋人を見付けて近付き、腕で首を抱く。相手は女と知って触り返し、二人は兄に気付かれぬよう戯れた後、娘は自分が誰かをささやいて手紙を渡す。その後青年は手紙で教えられた道を通って娘の寝室を訪れて4回交わり、二人の交際が続いた。

第二日目のノヴェッラ (第一日の主宰者ポンポニオから指名されたパンフィロが、自宅でノヴェッラの会を主宰して、語り手を指名する)

II-11 (イポリトが語る) 近年私がまだ髭が生え始めたばかりのころ、歩いてフィレンツェに向かう途中、サン・カシアーノで50歳の母と17歳の美しい娘の親子に会うと、二人はフィレンツェまで同行しようという。二人はフィレンツェの領域部の人で、母親が語るには、フィレンツェの貴族の家で長年召使だったがまだ給金をもらっていないので、娘の持参金のために受け取りに行く途中だという。給金を取り立てるため、私に娘の婿の振りをしてほしいと頼む。娘は私が気に入る、手を握ると握り返し、本物の夫のように扱おう。貴族の家では18歳ぐらいの主人の妻が現れて婿を誉め、戻って来た主人も私と娘を並べて座らせ、母親が給仕を手伝う。主人は三人を泊まらせ、若い二人を同室に、母親を別の部屋に泊まらせる。母親は

私の両足に娘のシャツを縫い付け、娘の身体も縛るが、私が誘惑すると、二人で糸を切らずにシャツをすっぽりはずし、その夜は一睡もせずを楽しむ。母が来る前に元に戻し、夜明け時母が来ると二人は鼾をかいて寝たふりをしている。母娘ら三人でフィレンツェを見物、戻ると主人から何回やったかと問われ、「あなた方には負けます」と答える。同様に8日間過ぎた後、主人は私を銀行へ連れて行き、私と結婚するはずの娘の持参金として母親の給金20スクードを金貨で払い、妻を可愛がった褒美として私に10スクードくれた。翌朝出発して、私は母と娘に30スクード渡すと母は感謝した。その晩の宿賃も私が払い、すすめられて彼女らの家に行き、その夜も娘が来て抱いてくれた。その後近くに住んで、何カ月も娘と会い続けたが、やがて夫が遠くの田舎へ連れて行った。

Ⅱ-12 (アウレリアが語る) 最近のナポリで、貴族トメ氏に息子と娘が一人ずついたが、娘は賢いのに息子は馬鹿で醜い。自分こそ天下一の美男子で知患者だとうぬぼれ、父の友人カラファ枢機卿の宮廷に出入りし、枢機卿から優しく迎えられるが、女達には相手にされない。シエナの若者が、得意になって女達の中を馬で行く彼に声をかけ、下馬させて鞍の位置が曲がっていると直させる。同じことを4回も繰り返して皆を笑わせた。

Ⅱ-13 (フルジダが語る) まだ最近のローマで、マニエーラ伯妃の宮廷に出入りする70歳の老人バローゾが16歳の娼婦を恋し金を巻き上げられる。彼が帰郷していた間に娼婦は24歳の神父と仲良くなり、神父は警吏に化けて老人を追い出す。老人は恋に狂い魔術にたよる。魔術師だと教えられたシエナの貴族デイフェーボは、別のシエナ人ロドヴィーコを紹介し、ロドヴィーコにはバローゾへの悪戯をけしかける。バローゾが相談に行くと、ロドヴィーコはヒルで老人の心臓、頭部、肝臓の血を採らせ、娼婦に魔法をかける用意をさせる。老人は薬屋で買ったヒルに血を吸われて出血騒ぎとなる。デイフェーボはロドヴィーコの悪戯を逐一伯妃に報告する。呪文

ピエトロ・フォルティニ『初心者たちの楽しき愛の夜』の輪郭

を唱えるため伯妃の屋敷の中庭で祈っている老人に、女達は二階から溲瓶を投げつけ便の入った容器をぶちまける。老人は洗濯桶の水で長衣を洗い、翌朝デイフェーボに彼らの仕業だろうと問う。食事中に干していた老人の長衣が隠され、ユダヤ人が別の長衣を持って来る。ロドヴィーコは老人に魔法の実行をすすめ、薬草や材料を集めさせる。伯妃は宴会を用意してバローゾを招待させるが、差し入れの御馳走を彼にだけ食べさせない。その席へ老人の長衣が見付かったという知らせが入る。翌日3回続けてミサを挙げてもらい、魔術のメモをテーブル・クロスの下に隠すが、クロスが片付けられて紛失し、探し回って神父達に怪しまれる。バローゾと親しいスペインの貴夫人クリスティーナがバローゾの恋を知って腹を立て、バローゾは贈り物を持って謝りに行く。夫人はお菓子で美人を作るといい、翌日バローゾが材料を届けに行くと、美人ユスティーナが現れたので驚く。翌日お菓子ももらって帰る老人を、召使らが襲いお菓子を壊してしまう。ユスティーナを迎えに行った召使らは泣いて戻って来て、彼女を奪われたと報告した。彼女から手紙が来て修道院にいるから変装して会いに来て欲しいと頼まれたバローゾは、会いに行き相手に罵られて、「あなたは馬鹿です」と真相を告げられて、自分の費用で宴会を開くことやボーイに扮装することに同意し、ユスティーナに毎日御馳走を贈る羽目になり、長衣を見付けてくれた神父にもたかれ、断ると知事に訴えられて、皆の前でこれまでの失敗を話して、聴衆に笑われ神父に5ジュウロ払わせられた。

Ⅱ-14 (ポンポニオが語る) 近年のフィレンツェで政変があり、亡命者が多数ローマへ逃れる。フランチェスコ・デ・バルディは美しい妻アレサンドラとフィレンツェ商人チャーボの家に逃れる。チャーボがアレサンドラに恋して言い寄ると、彼女は受け入れる。それに気付いた夫は家を借りフィレンツェ生まれの女中を付ける。妻はチャーボと関係し続け、夫の旅行中チャーボを招いて浮気する。アレサンドラの向かいにシエナ貴族の大

商人ゴデンシオが住む。アレサンドラの女中はシエナ貴族の下男に恋し、シエナの貴族はアレサンドラに恋して手紙と使いを送る。女中は自分の恋のため、アレサンドラに「外国人を抱くのは同国人を抱く百倍の価値がある」と勧め、女主人が興味を持つとゴデンシオを訪ね、彼が自分と下男の仲を取り持ってくれたら、女主人との恋に協力すると約束する。下男は最初興味を示さなかったが、主人の命令で早朝火を貰いに来た女中を抱く。女中はふんぎりのつかない女主人に、ゴデンシオがチャーポとの仲を夫にばらすと言っていたとおどして同意させる。ゴデンシオはアレサンドラの許に行き歓迎されて愛しあう。この時期チャーポの仲間の有力者が法王庁の検査を受けることになり、危険を感じたチャーポは荷物をアレサンドラの夫に預ける。夫は勝手にチャーポの荷物を調べ、妻からの手紙を見付けて怒る。翌朝夫はさらに妻が保管していたゴデンシオの手紙を見付けて逆上し、ナイフを持って妻を襲う。ゴデンシオが留めに入りそれは別人の筆跡だと言い、別の手紙を見せて説得する。ゴデンシオの世話になり、借金もある夫はその説得に応じ、彼を食事に誘って和解した。以後アレサンドラはチャーポを捨て、ひそかにゴデンシオと関係し続けた。

Ⅱ-15 (コリンツィアが語る) ルッカで冒涇へのきびしい禁令が出され、貴族の若者多数がシエナに亡命。その一人ステーファノが女性への悪口を言うのを聞き、シエナ人貴族の若者スパヴェンタートが、ある未亡人の二人の娘の片方を妻に世話しようと言う。財産家と聞いて乗り気になったステーファノが、帰郷する緞帳屋を通して兄の了解を得てその手紙を見せる。スパヴェンタートは友人と二人で、彼をマドンナ・デッラ・グロッタの教会に案内し、ある未亡人が夫の死後自家の礼拝堂に奉納した自分と二人の幼い娘の絵を見せて、娘のどちらか好きな方を選び、と言う。からかわれたと知ったステーファノは剣を抜こうとするが、皆でなだめて御馳走を食べて仲直りした。こうしてルッカ男の本音が暴露された。

Ⅱ-16（アドリアーナが語る）最近のフィレンツェで、トルナクインチ家の15～16歳の娘を抱えた未亡人は、財産目当てに娘の相手を押し付ける親戚が信用できなくなり、サント・スピリト修道院の修道士フラ・コルバッチョだけに頼る。修道士はピサの大金持の貴族の一人息子だと言って、自分の24歳の弟子アウレリオを紹介し、4人の修道士を召使に化けさせて信用させ、うまく婚礼にこぎつけるが、アウレリオが毎日修道院に戻って勤行を続けている内に、娘は教会でミサを上げに現れた夫を目撃する。その夜娘は夫の帽子の下を探り剃髪していることを確かめる。翌朝娘が母に訴え、母はコジモ一世に訴える。コジモは修道士の逮捕を命じたが、修道士の師弟はすでに逃亡し、協力した弟子3人が白状した。コジモは弟子達を釈放したが、修道院を脅して2500スクードを出させ、未亡人の全財産8000以上に上乗せして持参金とし、ふさわしい婿を見付けてやる。

Ⅱ-17（コンスタンシオが語る）最近オルシーニ家の暴君ニコラ伯が統治するピティリアーノで、放蕩者で嫉妬深い夫が毎晩深夜に帰宅して妻を殴る。妻は夫の上着とズボンを縫い付けて藁をつめ、女性の人形とベッドに寝かせておく。この時暴君の父親の軍勢が攻めて来たので市民は武装を命じられる。武器を持って帰宅した夫は、妻の浮気の現場を捕えたと信じて大鎚で人形を10回突き、殺人を犯したと信じて逃亡しかけたところを警備隊につかまる。翌朝伯に調べられて妻殺しを白状し、自宅の前で縛り首にせよと宣告される。処刑寸前に妻が現れたので釈放され、妻は人形を見せて訳を説明した。釈放された夫は態度を改めて優しくなる。

Ⅱ-18（フィロテオが語る）近年のミラノにビアンカという30歳ほどの貴族の未亡人がいたが、再婚の意志なく信心深いので、スペイン人のフランチェスコ派厳修会修道士がカモにして毎日何かをせしめる。ビアンカは片手の中指にひょうそができたので相談すると、スペインで女性だけに効くやり方だといって、彼女自身の陰部に入れておかせると膿が出て痛み

が取れる。それから何日か後修道士は仲間とやって来て、自分も病気になったから治してほしいと頼み、仲間を別室に待たせて彼女と寝室に入り、病気になったと称する自分の陰茎を、すでに効能が証明済みの彼女の陰部に入れ、2時間で5回も治療を受けて快楽に目覚めさせ、その後は機会あるごとに治療を受けるようになった。

II-19 (エミリアが語る) かつてローマで、ある娼婦が貴婦人が着るバツティクロー(短いマント)を着用したので、貴婦人はセナトーレに訴え、娼婦は貴婦人こそ娼婦からその技を盗んでいると反論した。役人はこれまでのことは水に流し、今後着用したら鞭打ちにすると宣言。パスクイーノ像に毎朝8~10篇のソネットが張り出され、娼婦の技を盗んだ貴婦人を公表したので、貴婦人は閉口して娼婦にバツティクローの着用を許す。

II-20 (パンフィロが語る) かつてシエナ領域部に、文盲だが二つの教会を預かる神父がいた。ある主婦が浮気したという告白を聞いて、自分も誘惑して関係を結ぶ。主婦の夫がある店から未払いの金の件で訴えられていて、夫がその裁判に欠席したため、警吏が差し押さえにやって来る。浮気中の主婦は神父をベッドの下に隠し、警吏に主人が見たら腕をへし折ると脅かす。警吏は金目の物を探して、熊手でベッドの下を掻き回し、神父の脚を傷つける。神父の悲鳴を聞き、熊手に血が付いていたので、警吏は怖い主人だと信じてシエナまで逃げ戻る。名誉と財産を守った主婦は神父と関係し続けた。

第三日目のノヴェツラ(第二日の主宰者パンフィロから指名されたフィロテオが、自宅でノヴェツラの会を主宰して、語り手を指名する)

III-21 (ポンボニオが語る) 最近のコツレ・ディ・ヴァルデルサで、名家の美しい未亡人チェーカに35歳のフランチェスコ派の修道士が恋し、告解の際雄弁を振るう。心の罪は肉体の罪より重いと説き、未亡人は若者一人だけを相手にすべきだと勧める。そのための避妊薬を教えようと約束し、

ピエトロ・フォルティニ『初心者たちの楽しき愛の夜』の輪郭

女中が外出中に訪問。ウリヴェッコ織の袋を見せてこれがその薬だと告げ、袋を男根にかぶせて4度も交わる。その後毎日楽しみ続けた。

第22日（アドリアーナが語る）最近のフィレンツェで、フランチェスコ派の修道士が貴族の娘に恋して手紙や使いを送り続ける。恋人がいる彼女はコジモ公の側近の二人の兄に訴える。翌朝フィレンツェきっての仲介役の65歳の貴婦人が連絡を取り、その夜修道士が兵士に化けて娘の寝室を訪ねる。兄二人が何も知らない振りをして現れ、修道士をかばう振りをする妹を家の名誉を傷付けるなど叱りつけ、修道士を縛り上げて長持ちの上どころがし、剃刀で睾丸を切り取る。悲鳴が聞こえる下の階で、娘は恋人と交わる。二人の兄は睾丸を真っ赤に焼けた鉄で灼いてタオルにくるみ、ミサができるよう修道士に返してやる。修道士は二人に100スクードずつ贈ると約束して釈放された。修道士は床屋を呼んで手当してもらい、口止め料に10スクード払うがコジモ公の耳に入り、下手人を調べる公に修道士は兄弟の名前を告げる。公に調べられて二人は「妹を犯そうとしたから」と釈明し、公は一月前の修道士の不祥事を思い出して、修道士を焼き殺そうと言い出し、あわてて兄弟が制止する。公は笑って怒りを鎮め皆を許すが、修道士は長く嘲笑された。

Ⅲ-23コンスタンシオが語ったが、大部分欠落して、時代、場所、階層不明。

Ⅲ-24（コリンツィアが語る）近ごろのローマでサント・オノフリオ教会の修道士は遺産が転がり込み、年3割で貸す高利貸となる。金持ちの貴夫人に恋して、一時間だけ付き合っほしいと手紙で懇願。相談された夫は、50スクードくれれば承諾すると妻に返事させる。寝室に通された修道士は100スクードと首飾りを出す。夫人はドアを閉めに行ったまま消え、夫と二人の下男が現れて修道士を棍棒で殴る。20日も床についた後修道士は打撲傷を示し、夫を知事に訴える。夫は出頭して「冗談ですよ。もし本

当に自宅で捕えたら首を切っています」と答え、知事も証拠不十分で夫妻を無罪放免した。

Ⅲ-25 (パンフィロが語る) 最近のパドヴァで若くて美しい貴夫人が、夫では飽き足らなくて外国人学生と付き合う。暑くて寝室のドアを開けたまま浮気していると夫が帰ってくる。夫人は学生をドアの後ろに隠し、夫に面白い話を聞いたといい、ある夫人が学生と楽しんでいると夫が戻って来たので、突然長いエプロンを脱ぎ、「ターディ橋のところで夫が妻に追い付くと、妻はこんなふうのエプロンを夫の頭にかぶせたの」と言って夫の頭にエプロンをかぶせ、その間に学生を逃す。夫はお前は実際にやらないと話ができないのか、とぼやきながらエプロンはずすが、妻の話を面白がり、市内でしゃべり回る。

Ⅲ-26 (イポリトが語る) 私がローマを訪ねた時、親友の家に泊まって骨董屋を回り、残り少ないお金でローマ市内を散策中、以前シエナで親しんだ若い娼婦のカテリーナから声をかけられる。実は迷子だというと、今いるローマ一流の娼館へと案内してその女主人を紹介してくれた。女主人は私の良い評判を聞いていると言い、今日は予定がないから自分がもてなしてやろうと申し出る。時間が遅いので迷っている私に、カテリーナはベルヴェデーレ(良き眺め)に案内しようと大階段を上らせる。革で飾られた部屋で豪華に着飾った18歳の若さの女主人を見た私は、一夜を共にしたいと願い出る。女主人は私のカテリーナとの4年間の交際に免じて願いを認め、豪華な部屋で御馳走を振る舞い、カテリーナらが二人の床入りを手伝う。病気の汚点のない美しい肉体と夜中過ぎまで愛し合った後、軽い夜食を食べて翌朝正午ごろまで眠る。お金の持ち合わせていないことをあやまり、また来ると約束すると、女主人は「私はあなただけで満足です。私をあなたの召使にして下さい」と言った。私は「こちらこそ忠実なしもべです」と答えて去った。外泊を心配していた友人に起こったことを話すと、

彼女はとても有名な女性だと教えられた。

Ⅲ-27 (アウレリアが語る) ミラノの貴族トリッパはカール五世のお墨付きをもらい、裁判長官としてシエナに乗り込むが、強欲で自分の小作人を警察長官に、ボーイを判事に任命し、その給料の一部をピンはねする。その妻は28歳の美人で、若い法律家やスペイン人の警備隊長などと浮気している。法律家が彼らを情婦の家に招待した夜、シエナの青年達は情婦の家から出て来たトリッパとその家来に投石し始め、トリッパだけは豪華な服装と長靴のために逃げ遅れたが、広場の警備員達に守られてようやく帰宅した。夫人はスペイン人と浮気した後一緒に眠っていたが、夫がドアをたたき音で、スペイン人を別室から外へ逃し、夫が戻った後に訪ねて来た彼を中に入れてやる振りをした。トリッパは恐怖と打撃で頭がおかしくなり、まだ暖かいベッドに飛び込むと、数日間寝込む。貴族の青年アニバーレが何人かの若者と喧嘩して200スクードの罰金を命じられたが、裁判で抵抗する。トリッパ夫人は20歳のアニバーレが気に入って深い仲になる。罰金の4分の1を受け取る予定のトリッパが、任期が終わりに近いので焦り、早く払わねば綱の拷問にかけるとアニバーレを脅すと、心配した夫人が夫の金庫から50スクード盗んでアニバーレに渡す。アニバーレの義兄の検察官が義弟のために司教に訴え、この罰金の取り立てを上から禁じた。違反すると破門となるこの命令に、トリッパは髭を搔き筆って悔しがるが、従わざるを得ない。彼の夫人はアニバーレ達と浮気しまくり夫の名を汚した。

Ⅲ-28 (フルジダが語る) ごく最近、ドゥオモの司教礼拝堂付き司祭が店子の職人の妻を口説こうと地下室にもぐりこむ。注文されていた薪が運び込まれて閉じ込められ、暗闇の中で便所の穴に転落して腕まで沈み、午後二時から日没後四時間まで待って、ワインを取りに来た職人の妻に助けを求める。女は夫の寝た後棒の先につけた綱を垂らしたが、一度目は転落し、二度目に救出される。司祭は20日間寝込む。女が親友達に漏らしたの

でシエナ中に噂が広まる。司祭が広場でからかう少年を追うと、少年はリンネル製造店に逃げ込む。司祭の呼び名が「美しいアントニオ」から「くそアントニオ」に変わる。

Ⅲ-29 (エミリアが語る) 近年のウンブリア州スポレートで、青年貴族アントンが貴族の若妻に恋したが、夫を愛する妻は見向きもしない。アントンが夫を殺そうと帰宅途中を襲い、夫は血を流して帰宅。武器を取って戦う習慣を持つスポレート女の妻は、投げ槍を手に飛び出しアントンを刺す。脇腹を刺されたアントンは死に、知事は3度も妻を綱の拷問にかけるが妻は口を割らない。知事が夫を拷問にかけようとする、妻は自分が殺したと白状した。残酷な知事も妻を哀れみ、アントンの父の許しを得て夫婦を釈放した。

Ⅲ-30 (フィロテオが語る) シエナの貴族の青年が皇帝軍の傭兵隊に加わり各地で戦うが、稼ぎが少ないのでルッカの旗手に雇われ毎日何度かジューリ広場を監視する。広場に面した窓に現れる貴族の三人姉妹の内中の娘で16歳のオリエッタが気に入り、彼女も彼を恋した。二人は老女を介して文通を続けたが、2年後に旗手は帰国することになり、オリエッタは一緒に行きたいと伝える。旗手は引き継ぎのため出発を1ヶ月延ばし、シエナから迎えに来ると約束して別れた。何もなく歳月が過ぎ、妹が18歳を越えたのでオリエッタは焦り、老女をシエナに使いにやって、別荘からの逃亡計画を知らせる。元旗手は自分では行けないので親友の主従に迎えに行かせる。三人姉妹はルッカから3マイルの別荘へ行き、農民と共に踊る。夜中に元旗手の親友からの連絡があり、オリエッタはわずかな手荷物を持って、用意された馬で逃走を開始した。姉はオリエッタがいらないのに気付いき、農夫を父の許に送って伝えた。父は息子と馬で出発、途中で亡命中の若者を雇い案内させる。マンドルリの宿屋で父子はオリエッタを発見。元旗手の友は逃れたが、従者は6つも傷を受けた。父子は娘を殺そうとしたが思

ピエトロ・フォルティーニ『初心者たちの楽しき愛の夜』の輪郭

いとどまる。娘は修道院に入れられ3日3晩何も食わず元旗手も同様だった。噂はルッカ中に拡がり、二人の姉妹も婚期を逸して自宅で蟄居した。

注

- 1) P. Fortini, *LE GIORNATE DELLE NOVELLE DEI NOVIZI*, Salerno Editrice, Roma 1988, Tomo I-II.
- 2) P. Fortini, *LE PIACEVOLI E AMOROSE NOTTI DEI NOVIZI*, Salerno Editrice, Roma 1995, Tomo I-II.
- 3) 注1)の作品の T. I, p. XL.
- 4) Ibid.
- 5) 注1)の作品の T. II, p. 877.
- 6) カモッリーア通りから分かれたフォンテジュスタ小路にあるサンタ・マリーア・イン・ポルティコ・ア・フォンテジュスタ教会のこと。
- 7) 雪合戦はA.グラッツィーニ（1503-84）の『晚餐』の額縁でも使われている。そこでは一月の末に貴族の青年たちが雪合戦しているところへ、貴婦人たちがちょっかいを出すことで話が始まるが、それが書かれた時期は1544年から49年の間とされているので、時間的にはフォルティーニが影響を受けた可能性がある。しかしグラッツィーニの作品は18世紀まで刊行されていないという理由を挙げて、アドリアーナ・マウリエッロはその可能性をあまり認めていない。注2)の作品の T. II, p. 1208 の脚注5 参照。Grazzini, *Le Cene*, (a cura di Riccardo Bruscoli, Roma 1976) Introduzione al novellare, 6-7.
その概略は、米山・鳥居著、イタリア・ノヴェッラの森、佐井寺三角社、大阪 1993、545ページ参照。
- 8) 『ラヴィニア』は五日目の第31話、『鰻』は一日目の第3話による。
- 9) ミハイル・バフチン著、川端香男里訳、フランソワ・ラブレールの作品と中世・ルネサンスの民衆文化、せりか書房、東京 1980参照。
- 10) R. S. Lopez, *Hard Times and Investment in Culture*, in *'The Basic Renaissance Interpretations'*, D. C. Heath and Company, 1974 Lexington etc.
- 11) 米山喜晟、ピエトロ・フォルティーニ『初心者たちのノヴェッラの日々』

の輪郭（桃山学院大学『国際文化論集』30号，大阪2004）の106ページ参照。
12) 前章注1)の109-112ページ参照。

A Profile of “The Pleasant and Lovely Nights of the Novices” of Pietro Fortini

Yoshiaki YONEYAMA

After his “The Days of the Novels of the Novices”, Pietro Fortini wrote another work titled “The Pleasant and Lovely Nights of Novices”.

Chap. I The last mistress of “The Days” didn’t abandon the right of ruling the group, and invited other members to her mansion house on the next Sunday evening. On the first night, the mistress Aurelia gave a grand dinner and offered a comedy. Thus began again the party of the former seven members. But in this work, especially on the initial four nights, novels were told only exceptionally. The main contents of the entertainment of the nights were comedies, songs and luxurious dinners. On the third night, four young gentlemen took part in the party, and three of them were accepted as regular members. The mistress of the sixth evening, Fulgida, pronounced the resumption of the party of novels, and ordered the three new members to preside over the party instead of her. Under the control of the new members, they began three days of novels, but the night party also continued as before. Thus the novels occupy only 25.60% of this work. The seven comedies occupy 46.04% and the part of the framework with many songs occupy 28.36%.

Chap. II As in the case of “The Days”, all the events of the novels happened in recent years. But as for the locations of the events, the share of Siena and its neighboring towns decreased from two thirds to one third because Rome, which figured only once in “The Days”, figured in 22.58% of this work.

Chap. III One of the most important particularities of this work is that nobles take the major part. While commoners take part in 58.06% and priests in 35.48%, nobles take part in 80.64%. About half (51.61%) of the characters

are Sienese.

Chap. IV In “The Days”, almost all novels dealt with sexual or scatological subjects. Also in this work, sexual subjects take the major part (directly in 35.48% and indirectly in 29.03%), but one third of the novels deal with subjects which are not related to sexual acts.